

大宰府原山はらやまにいた二人の僧

原山は四王寺山しおうじの南東麓ふもとに位置し、無量寺むりょうじ(あるいは無量院)という寺院がありました。その縁起によれば、比叡山ひいざん延暦寺えんりやくじの僧円珍えんちんが入唐にっぽんする際、門人の華台坊けたいぼうらが天安てんあん2(858)年に八坊を開創し、後世、太宰府天満宮に奉仕して、その社僧となつたと伝えます。今回は鎌倉時代にこの原山に住んでいた二人の僧を紹介したいと思います。

一人目は「良範」という僧です。大宰府出身で姓を惟宗これむねとする月堂宗規げつどうそうきという僧は、正安元せいあん(1299)年、15歳にて、観世音寺において剃髪・受戒しました。その後、原山醍醐寺だいがくじの僧良範について戒律と天台学を学んだといひます。ちなみに月堂は、その後大宰府崇福寺すうふくじの住持であった南浦紹明なんぽしやうめいに参禅し、京都の万寿寺まんじゆじや建仁寺けんにんじ、龍翔寺りゅうしやうじ等を転々とし、筑前に帰つてからは、崇福寺の住持や博多妙楽寺みょうらくじの開山となるなど、禅僧として大変活躍した人物です。

もう一人は「聖達」という僧です。時宗の開祖として名高い一遍智真いっぺんちしんは、建長3(1251)年の春、13歳にて、

太宰府人物志

資料室だより③

原山弘西寺に住んでいた聖達の弟子となりました。そこで、まず「文字読み」してくるように言われ、肥前国清水の僧華台のもとへ出向き、研鑽を積んで翌年聖達のもとに帰り、その後は聖達の元で仏教を学んでいました。弘長3(1263)年には父が死去したため、一旦は郷里の伊予いよに帰国し、還俗したようですが、文永元ぶんえい(1264)年には出家した弟聖戒しょうがいを伴つて再度大宰府を訪れ、聖達に従つて浄土門に皈依することになります。

聖達は浄土宗を開いた法然ほうねんの孫弟子に当たり、天台寺院の原山に属し、天台系の西山義せいざんぎを説いていた人物です。また、一遍の出自である伊予河野氏いよののうぢとも俗縁があり、その関係で一遍が聖達に学んだのであると推察されています。

ここに見える醍醐寺も弘西寺も原八坊とされる寺院とは一致せず、他の史料にも恵まれないため、残念ながらその実態は不明というしかありません。逆に高名な僧が関わりを持ったためその存在が明らかになったという点で、むしろ幸運だったといふべきかもしれません。